

見田社会学の理論構造における時間的契機と社会的契機

——「時間の社会学」から「社会学の時間性」へ——

神戸大学大学院 徳宮俊貴

(社会的) 時間研究において、近代的な時間をめぐっては、(i) クロックタイムに代表される計量可能性と抽象性および(ii) 歴史記述に代表されるような直線性、という2つの側面が——互いの文脈に隔たりを残したまま——論じられてきた。この2つの近代的時間論を架橋しうる枠組みとして、見田宗介(真木悠介)の『時間の比較社会学』(1981)の理論図式は、一方で評価され、他方でその類型論主義的な性格を批判されてもいる。

しかし、見田の4象限図式の、「(時間の)社会学」に対する射程を展望するには、時間意識論をいったん離れて、見田社会学自体におけるその理論的含意をも理解しなければならない。そのさい、4類型それぞれの現実的な妥当性以上に(再)検討すべきは、そのような4つの「理念型」を可能にする「パターン変数」、すなわち、(α) 自然性に対する人間性の内在／超越と、(β) 共同性に対する個性性の内在／超越という、2つの軸のほうである。

見田によれば、(α) 自然の加工(労働)と(β) 他者との交流(交通)は、人間が生きてゆくうえで不可欠の条件であると同時に、それ自体が歓びの源泉でもあるという意味で、遍在的に欲求されるものである[『人間解放の理論のために』(1971)]。人間は、労働のなかで自然を、交通のなかで社会を対象として認識する。つまり、(α) 労働は「対象化をとおしての享受」という「時間性の回路」をもち、(β) 交通は「譲渡をとおしての領有」という「社会性の回路」をもつわけだ[『現代社会の存立構造』(1977)]。こうして、現在と未来とが相互に相対化され、個人と社会(あるいは自己と他者)とが相互に相対化される。この、(α) 時間的パースペクティブと(β) 社会的パースペクティブという2つの遠近法が交叉するところに、価値現象が生ずるのである[『価値意識の理論』(1966)]。

このように、見田の社会学理論は全体として、対自然関係における〈時間的契機〉と対他者関係における〈社会的契機〉、などと呼ぶうる2つの契機の交錯するところに成り立っているといえる。この2つの契機を組み合わせた理論図式を、見田はさまざまな位相に適用している。たとえば、『現代社会の存立構造』では、労働が生産手段の生産によって媒介され、交通が私的所有によって媒介される近代資本主義的社会を分析対象としているのに対し、『時間の比較社会学』では、そこで前提されていた「人間主義的な合理主義」の存立それ自体が——時間意識を直接の題材としつつ——問題化される。

本報告で確認される〈時間的契機〉と〈社会的契機〉との交錯という視座から、見田の理論体系をとらえ返すことで、つぎのような課題に進むことが可能になる。すなわち、第一に、近代日本民衆精神史から未来構想論まで多岐にわたって展開される見田社会学の、理論構造を立体的に把握することができるだろう。第二にそれは、(社会的) 時間研究の枠組みを提供するのみならず、社会学理論において時間的契機を(再)導入ないし明確化する可能性をも、秘めているのではないだろうか。とりわけ、自然との関係から現在と未来の析出を論じようとする見田の理論構成は、多くの(社会的) 時間研究がまず現在と過去との関係を措定し、そこから未来を比定してきたことに対して、少なからぬ示唆を与えるものと考えられる。